

A・MUSEUM

ア・ミュージアム

vol.23



ミュージアムパーク

茨城県自然博物館



(撮影：大内 董)

山の春を彩る日本のアネモネたち

アネモネというと、みなさんは色あざやかな大輪の花を思い浮かべると思いますが。しかし、日本の春に咲くアネモネは、どれをとっても妖精のように可憐な花ばかりで、園芸種のアネモネとは趣が異なります。ここでは、こうした春を彩る、キンポウゲ科イチリンソウ属（Anemone属）の植物を、いくつか紹介したいと思います。

上の写真の花は、キクザキイチゲです。この仲間は花弁がなく、美しく開いているのはがくです。色は、写真のものはうっすらとピンクがかっていますが、純白のものから紫や青になるものまで様々です。本県では、筑波山のもものは色彩が多様ですが、当館第3展示室の、山地林のジオラマのモデル地になっている北茨城市定波では、不思議と純白の花以外は見つかりません。

また、最も普通に見られるニリンソウは、左の写真のように大きな群落をつくり一面に白い花をさかせます。

(教育課：飯田勝明)



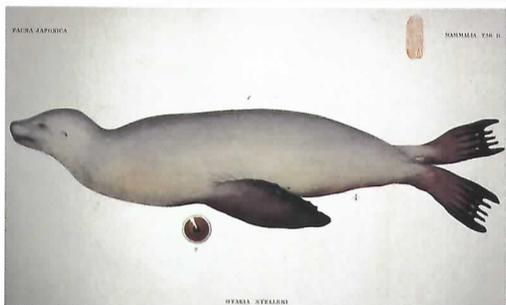
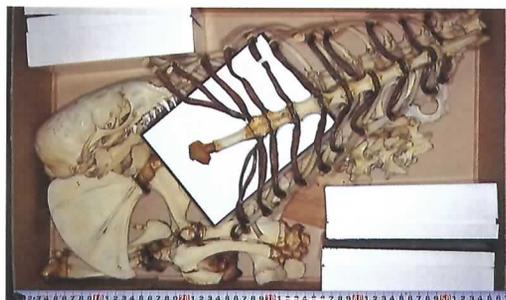
(撮影：大内 董)

第18回企画展

Von Siebold's Perspective on Japan's Nature

シーボルトの愛した
日本の自然

—紫陽花・山椒魚・煙水晶—



絶滅したといわれているニホンアシカの骨格標本（ライデン国立自然史博物館所蔵）と日本動物誌（福岡県立図書館所蔵）の図版

みなさんはシーボルトという名前から何を連想しますか。名高いオランダの医者とか「シーボルト事件」などを思い浮かべる人が多いのではないのでしょうか。事実、シーボルトは江戸時代後期の1823年来日し、長崎出島のオランダ商館医として6年間滞在しました。その間、長崎郊外に設けた鳴滝塾を拠点として優秀な日本人の医師を指導しました。

しかし、彼が日本にやって来た目的は、医師としての活躍より、植物、動物や鉱物など日本の自然史を研究することにあつたのです。シーボルトとその後継者であるビュルゲルらが日本で収集し、オランダに持ち帰った標本は数万点に及ぶといわれています。それら標本の多くは、オランダのライデンにある国立自然史博物館・国立植物標本館・国立民族学博物館に、現在も良好な状態で保存・研究されています。

シーボルトは標本をただ集めただけでなく、帰国してからもなお日本の自然史に関する研究に没頭し、その成果として『フロラ・ヤポニカ（日本植物誌）』『ファウナ・ヤポニカ（日本動物誌）』を刊行しました。これらは、美しい大図版とともに、知られざる日本の動植物を西欧に紹介するものでもありました。

この企画展は、ライデンの各博物館からお借りした日本初公開のシーボルト標本や彼の著作を中心に展示しております。そして、シーボルトの功績を通じて、当時の豊かな日本の自然を振り返り、シーボルトの研究を支え、教えを受けた日本の博物学を紹介しています。（資料課：小幡和男）

会期 平成12年3月18日(土)～6月18日(日)
開館時間 午前9時30分～午後5時(入館は午後4時30分まで)
休館日 毎週月曜日
入館料 大人 710円(570円)
高・大学生 430円(290円)
小・中学生 140円(270円)

* () 内は20名以上の団体料金です。
* この料金には、常設展・野外施設入場料が含まれています。

記念行事 4月23日(日) 記念講演会
「日高敏隆の昆虫ふしぎ体験記」
講師：日高敏隆氏（滋賀県立大学長）
5月13日、27日(土) 自然教室
「植物・昆虫標本をつくってみよう」(2回連続)

* 各行事は、全て事前申込制となっております。

展示の内容

はじめに／オタクサを愛した異邦人

日本を愛したシーボルトとはどんな人物？

第1部：シーボルトは日本の動物に何を見たか

オランダに眠る日本の動物標本と日本動物誌

第2部：シーボルトを魅了した日本の植物

オランダに花開いた日本の植物と日本植物誌

第3部：シーボルトが求めた日本の石

日本初公開・オランダ秘蔵の日本産化石と鉱物

第4部：シーボルトと医学

医師シーボルトが集めた日本の和漢薬

第5部：シーボルトと日本の科学者

シーボルトに学びシーボルトを助けた日本・茨城の学者たち

歴史あるライデンの博物館／おわりに

ライデンの博物館紹介



西欧にユリのブームをもたらしたカノコユリ（ライデン国立植物標本館所蔵）（左）
図版は日本植物誌（左上）とそのもとになった川原慶賀の原画（上右）



「白雲母」鉱物標本（ライデン国立自然史博物館所蔵）



和漢薬として使われたベニバナの標本（ライデン国立民族学博物館所蔵）

研究ノート◎岩石から地下の世界を探る

私たちは地球で生活していますが、半径約6,370kmもの地球の、その表面からわずか100kmの地下の世界にさえ、人類は未だ到達していません。しかし、現在地表に露出している、地下数10kmから上昇してきたと考えられている岩石（カンラン岩類）を詳しく調べることによって、地下の世界でどのようなことが起こっているのかを知ることができます。

北海道の中央部に、カンラン岩類（ほとんどは変質を受けて蛇紋岩になっている）・高圧型変成岩類などが南北に散在して連なる、“神居古潭帯”があります。この蛇紋岩類は、もとはプレートの沈み込み帯における、島弧側の上部マントル物質がもとになっています。

蛇紋岩地帯では、地滑りや崖崩れによる崩壊地形が発達します。野外調査では、蛇紋岩地帯を流れる沢を歩き、露頭や崩壊地ごとに蛇紋岩サンプルを採集します。蛇紋岩塊を大型ハンマーで割って、岩塊の中心部付近の蛇紋岩を取り出し、できるだけ変質を受ける前の岩石組織・鉱物粒子ができるだけ残存しているサンプルを探します。

博物館に持ち帰った数百個のサンプルは切断・研磨し、岩石薄片（プレパラート）を作成して、その組織を偏光顕微鏡で観察して、変質を受ける前の構成鉱物を推定します。また、カンラン石やスピネルなど、変質せずに残っていた鉱物を探し、分析機器でその化学組成を詳しく調べます。そして得られたデータを分析し、地図での分布領域と照らし合わせていくと、約1億年前に地下で起こっていた様子が浮かび上がってきます。

日本列島の地下では、沈み込んでいく海洋プレートから分離した水がカンラン岩に供給されることによって融点が下がり、カンラン岩の一部が溶けて（部分熔融といいますが）マグマが発生し、陸上に火山列島をつくり

だしています。

神居古潭帯（特に北部）のカンラン岩類のほとんどは、このように上部マントル物質が部分熔融を起こしてマグマが抜けたあとの残りかすです。しかも、岩石中に残っていたスピネルやカンラン石の化学組成を調べていくと、このカンラン岩類が、現在では世界中のどこの地下でも起こっていない、「極めて高い割合」の部分熔融の結果生じた、極めて珍しい岩石であることがわかってきました。

ところで、太平洋に浮かぶグアム島の東方沖合に、世界最深のマリアナ海溝があります。この海溝などの陸側斜面の深海底（前弧域）から、著しく鉄分に富んだ多量のカンラン岩類がたくさん採集されています。このカンラン岩類は化学的特徴、随伴する変成岩類などから、神居古潭帯のカンラン岩類と同じ成因で形成されたものと考えられています。つまり、神居古潭帯の蛇紋岩を研究することによって、私たちが実際に行くことのできない海溝付近の深海底の様子や、部分熔融度が著しく高くなるマグマ発生のメカニズムを解明することを試みていきます。（資料課：小池 渉）



蛇紋岩地帯の前壊地形（北海道知駒岳）
蛇紋岩はなだらかな斜面に、何段にもわたる地滑り地形をつくる。



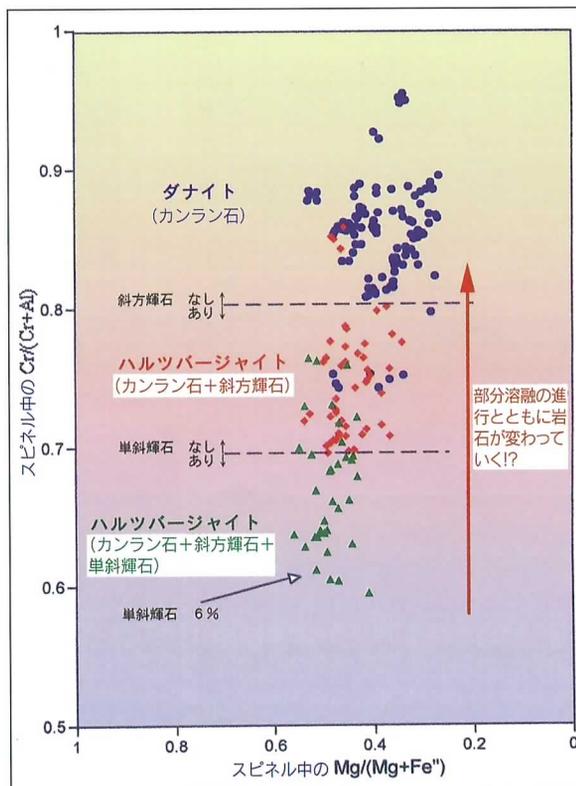
蛇紋岩体の中にとりこまれた異質岩体（北海道夕張岳）
侵食に強い変成岩類などが残丘状になって奇妙な光景をつくる。



ときにはこんな足跡も…（北海道知駒岳）
沢を歩くときには、ヒグマよけの鈴は必需品。



蛇紋岩の偏光顕微鏡写真
スピネル中に含水鉱物である金雲母結晶が多量に包有されている。多量の水があった証拠。

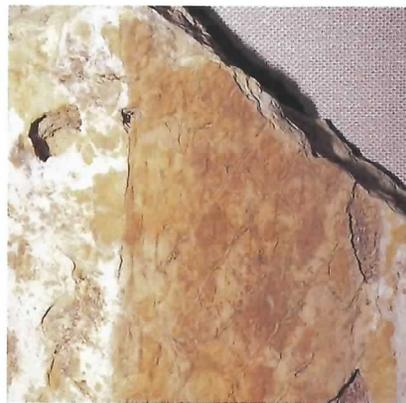


スピネルの化学組成の変化と岩相の移り変わり
部分熔融の進行とともに、スピネルの化学組成や岩石の構成鉱物が変化していく。

展示品紹介◎レピドデンドロン *Lepidodendron*



当館に展示されている化石

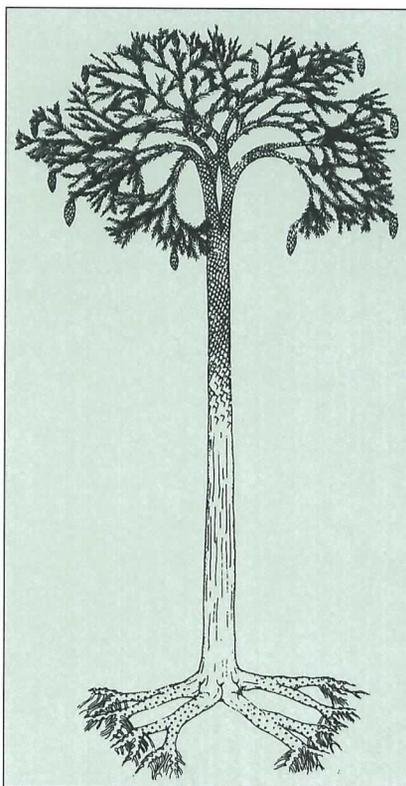


樹幹の鱗模様

この化石は、日本では鱗木(りんぼく)の名前で知られています。名前の由来は一目瞭然で、まるで鱗がはりついたかのような樹幹からついたものです。レピドは鱗、デンドロンは木の意味です。古生代石炭紀の代表的な植物化石として博物館でよく目にする化石のひとつです。

この植物が生きていた石炭紀(3億6千万年前～2億9千万年前頃)という名称はイギリスに広く分布する石炭を含む地層に由来しています。この時代、地球には巨木が生い茂る最初の森林が形成されていました。これらの巨木が地層中に残され石炭として保存されたわけですが、レピドデンドロンはその中心的な植物でした。

この植物は右の復元図にあるように幹が30mにも達する高木で、先端と根部は叉状分枝を何度も繰り返し、先端では樹冠を形成していました。茎の表面には縦に長い菱形の葉枕(葉が落ちた跡)がらせん状に配列しており、これが鱗のように見えているのです。



レピドデンドロン復元図 (D. A. Eggert)

レピドデンドロンの名称は植物全体及び樹幹・枝につけられた属名で、葉にはレピドフィルム(*Lepidophyllum*)、根にはスティグマリア(*Stigmaria*)などの名称(亜属名)がつけられています。というのも、化石植物の場合、植物体全体がそろって採集されることはきわめてまれで、通常それぞれの部分が離ればなれで発見されるからです。ばらばらになった各部分から一つの過去の植物体を復元することは、古植物学者のはたすべき仕事のひとつですが、たいへん困難な仕事です。

レピドデンドロンは絶滅してしまいましたが、その仲間(ヒカゲノカズラ類)は、大きさこそ比較にならないほど小さいものですが、今も世界中に(特に熱帯に)分布しています。

(教育課：滝本秀夫)



現生のヒカゲノカズラ類 ©大内 董

野外だより◎昆虫の森・コブシ

博物館の野外にある林は、クヌギ・コナラを中心とした雑木林です。この地方の林は、ほとんどが薪炭材を得るために植えられたもので、さらに、その落ち葉は農業を支える重要な堆肥となり、生活の基盤となっていました。

昆虫の森には、クヌギ・コナラとともに林内にミズキ・エゴノキ、林縁にはエノキ・ケヤキなどが混じり、ヒノキの植栽も見られます。また、コブシの大木が春にみごとな白い花を咲かせます。

雑木林に自生するコブシ(モクレン科)は、春3月ごろ、ソメイヨシノより1週間ほど早く純白の花をこずえいっぱいにつけます。コブシという名の由来は実の形が幼児の握りこぶしに似ているので付いたようです。実が割れると赤い種子が見えます。

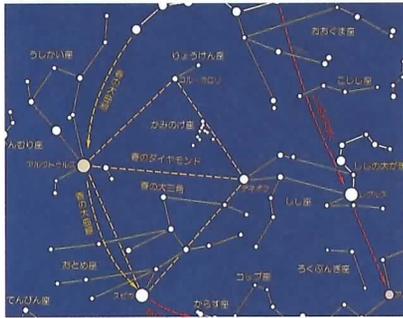
本種は、落葉広葉樹で樹高は15mに達します。冬の花芽には白く細かい毛が密生しています。花弁は6枚、花の後に新しい葉がでます。

(教育課：櫻井稔郎)



昆虫の森のコブシ (撮影：五木田悦郎)

歳時記◎春の星座



「北の空の春の星座」

野や山に花が咲くころになると、冬の星座は西にかたむき、夜の空は春の星座でかざられます。

その中で、もっとも目につくのが、北の空高くに見える北斗七星です。このひしゃくの柄のカーブに沿って、南に線を延ばしていくと、黄金色に輝くうしかい座のアルクトゥルス、さらにそのカーブを延ばすと、純白の明るい星おとめ座のスピカにたどりつきます。この大きなカーブを“春の大曲線”といい、春の星座をさがすときの目印になります。また、このカーブをスピカからさらに延ばす



「おおくま座」金の星社刊/藤井旭著
「やさしい天体かんさつ1 春の星座」

と、からす座を見つけることができます。

春の夜空には、ほかに、“春の大三角”や“春のダイヤモンド”とよばれる目印があります。

“春の大三角”は、うしかい座のアルクトゥルスと、おとめ座のスピカ、そして、しし座のしっぽのデネボラを結んでできる大きな三角形。“春のダイヤモンド”は、春の大三角形の星たちと、りょうけん座のコル・カオリを結んだものです。

このように、春の夜空には華やかな呼び名がついた星たちの組合せが見られるものの、実際は天の川から離れているた

め、星の数が少なく、少し寂しげです。

北斗七星のひしゃくの柄の先から2番目の星ミザルには、すぐ横に4等星のアルコルがあります。昔、アラビアの人々は、この星を視力検査に使っていたそうです。この星が見えれば、視力はよいということ。

これら2つの星は肉眼二重星(目で見て星が2つあるとわかる星)です。

そして、望遠鏡による観測で、ミザルそのものも、2.3等星と4.0等星からなる二重星であることがわかりました。さらに、ミザル二重星の2つの星それぞれは、分光器を使って星のスペクトルを調べると、2.3等星の星は二重星、4.0等星の星は三重星らしいことがわかったそうです。観測技術の発達により、より詳しいことがわかるよい例ですね。

冬に比べて随分あたたかくなりました。澄んだ空の夜、北斗七星、“春の大曲線”、“春の大三角”を目印に、春の星座をさがしてみたいかがでしょう。

(資料課：根本茂)

収蔵品紹介◎クマの仲間たち



哺乳類収蔵標本の大家ということでは、何といたってもクマの仲間を忘れることはできません。皆さんは、世界にクマの仲間が何種類生活するかご存じですか。ホッキョクグマ、ヒグマ(グリズリー)、アメリカクロクマ、アジアクロクマ、ナマケグマ、マレーグマ、メガネグマ、それに最近ではパンダを加えた8種類が知られています。

ところでこのクマたちですが、すべて

がワシントン条約に掲載されている上に、ほとんどは国際自然保護連合(IUCN)のレッドリストにも載せられているという、将来がとても心配されている動物たちです。したがって、博物館としては集めることがとても難しい仲間ということになります。

それでも博物館には少しずつクマの標本が集まってきており、1999年にはパンダ(これからますます入手不可能と思

ますが……)とマレーグマをのぞく、その他の6種類のクマたちを収蔵することができました。とはいえ、先に述べたように、国際的に取引が規制されている動物ですので、動物園で病気や老衰で死亡したもの、有害駆除で捕獲されたものなどを、できる限りのつてをたどって探した結果です。

ここに皆さんにお見せしているのは、ホッキョクグマの全身剥製標本です。妙に頭が大きくて、体が寸詰まりな変な標本ですが、これには訳があります。博物館にホッキョクグマの敷き皮(外国の暖炉のあるような居間にでんと飾られているあれです)を寄贈して下さった方がいて、その敷き皮を剥製に作り替えたからなのです。これなら新たにホッキョクグマを捕る必要もなく、多少不格好でも大手を振って標本を手に入れられるという訳です。これからの博物館の標本集めでは、こうした形での工夫がますます必要になってきそうですね。

(教育課：山崎晃司)

館職員レポート◎高橋 淳 (資料課・地学研究室)

星空を守りたい……

私はときおり星の観測に出かけています。1年前、私は北茨城のとある山中で茨城の貴重な財産を発見することができました。それは光害のない星空です。その夜、私は、真っ白に輝く天の川とともに、夜明け間近の東空に黄道光を確認しました。黄道光とは、太陽系内に円盤状に広がる微粒子が太陽の光を散乱させるもので、空の条件が大変良いところでなくては見ることはできません。

都会の空には、ネオンサインやライトアップなど人間が生活をするうえではそれほど必要のない光があふれ、また、工場排煙や車の排気ガスなどのように空中

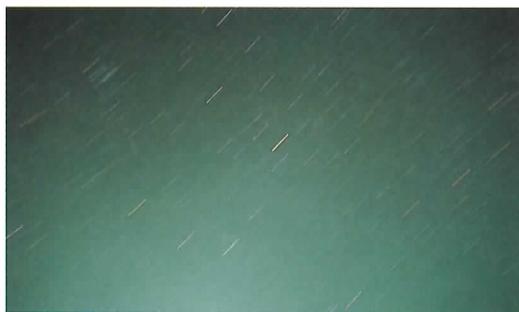
の光を散乱させる物質も増加しています。このため夜空は、天体以外の光で埋め尽くされようとしているのです。博物館付近もこの影響を受けており、ここ20年ほどの間で、天の川を見ることは大変難しくなりました。

夜の安全を保持するうえで夜間照明は当然必要です。しかし、必要以上の明かりは星を見えにくくするだけでなく、少なからず渡り鳥や産卵にやってくるウミガメにも良くない影響を与えているようです。また、ホテルの繁殖行動にも影響があるとされています。

私は昨年度より、友の会やボランティアの皆さんとともに環境庁主催の全国星空継続観測に参加しています。毎年夏と

冬の2回に星空の明るさを調査し、環境庁に報告をしているのです。暗い星空の残る地方山間部と比べると、夜空の明るさの違いはたいへん大きなものでした。今後は定期的に茨城県南西部の星空の明るさを観測してその実体を詳しく調査し、環境保護のための基礎データとして役立てていきたいと考えています。

私は、天文学に携わる博物館スタッフとして、宇宙の素晴らしさをお伝えするだけでなく、人類が失ってはならない天然の夜空を“皆・さ・ん・と・共・に”守っていきたくと思います。21世紀の子供たちにも、『まっ白な天の川』……見せたいものです。



黄道光—北茨城のとある山中にて
ほやとした光が黄道光です。



屋上からみた夜景 これでは天の川は見えません。



夜空に優しい夜間照明灯

博物館のそば、七郷小学校の照明灯です。光は空には漏らさず、下だけを照らしています。こんな照明が増えるといいですね。



観望会でのワンショット いつもたくさんの子供たちと星をみています。

コラム by director NAKAGAWA ◎トキのタマゴ

昨年5月、日本で初めての人工孵化でトキのユウユウ（優優）が生まれたのはご存じの方も多いと思います。

先日、佐渡トキ保護センターの近辻所長さんにお会いする機会があり、その時の裏話を聞くことができました。

二つ感動したことがあるのですが、そのひとつは、孵化一週間前に卵を孵化器から取り出し、平らな板の上に置くと微かに動くのだそうです。これは中国の

専門家が卵の発生の状況を判定するために使う方法だそうです。「卵は生きている！」と実感したと言っていました。もうひとつは、「嘴打ち＝はしうち」と言っていて、ヒナが自分の嘴で殻をつき割り姿を見せた瞬間だそうです。

近辻さんはトキの繁殖に32年の歳月をかけたのですが「ああ、これがその瞬間だ」と感無量だったということです。

近辻さんから贈られた写真をトピック

スコーナーに展示していますので是非ごらん下さい。



開館5周年記念式典 1月22日(土)

茨城県自然博物館は、姉妹館であるロサンゼルス郡立自然史博物館のジョン・M・ハリス博士をはじめ、多数のご来賓をお招きし、1月22日に開館5周年記念式典を行いました。記念式典では、橋本知事が「自然博物館が開館5周年を迎え、250万人を超える方にご来館頂いたことは、県民の皆さまのご支援・ご協力の賜物であり、心よりお礼申し上げます。今後も来館者の皆さまに楽しさと感動を与える施設の運営を目指して、さらに努力して参りたいと考えております。」と式辞を述べた後、中川館長から開館5年の経過報告がありました。その後、開館5周年を記念して、ハリス博士より知事に対してサーベルタイガーの実物全身骨格の引き渡し式が行われました。このサーベルタイガーは、当日から開催された特別企画展「サーベルタイガーとミュージアムパーク開館5年のあゆみ」において、実物全身骨格として国内では初公開されました。式典の最後には、岩井市



開館5年経過報告

立七郷小学校の児童のみなさんによる「博物館へのメッセージ」の紹介、岩井市神田ばやし保存会のみなさんによる、伝統芸能「神田ばやし」の披露が行われました。

式典終了後、企画展示室前にてテープカットが行われ、特別企画展がいよいよオープンしました。サーベルタイガーの実物全身骨格をご覧になった方々からは、「レプリカに比べて、本物はやはり質感が違う。」との感想が聞かれました。テープカット



サーベルタイガー骨格標本引き渡し式



テープカット

IPAM事業による国際交流

当館の山崎学芸員が2月20日から3月26日まで、IPAM (International Partnerships Among Museums-博物館相互の国際協力) 事業によって、姉妹館のロサンゼルス郡立自然史博物館に派遣されました。これは、AAM (全米博物館協会) によるもので、アメリカの博物館と海外の博物館との間で、相互交流を図り、共同プロジェクトを開発するこ

とを目的としたものです。当館はロサンゼルス郡立自然史博物館との長年に渡る協力関係が認められ、数多くの候補の中からIPAM事業の対象館として選ばれました。5月には、ロサンゼルス郡立自然史博物館からメガン・ウォルシュ氏が当館に約1ヶ月間派遣され、共同研究を行います。



山崎学芸員とメガン・ウォルシュ氏

水系だより

水族館、博物館へ行くとき多くの水生生物が水槽越しに見られますが、その裏側がどのような仕組みになっているか、ご存知でない方も多いかと思います。今回は飼育展示するための中心となるろ過循環について紹介します。

第3展示室でのろ過循環はポンプによって水槽内の汚水がろ過層へ行き、熱交換器(水温調節するところ)から殺菌装置を通過し、ばつ気槽(水を叩いて溶存酸素を増やすところ)から水槽へ戻されるといった仕組みになっています。ろ過と聞くと皆さん水槽内のゴミなどを除去、すなわち物理ろ過をすることを想

像するとは思いますが、これ以外にとっても重要なものがろ過槽内(ろ砂の中)に棲んでいます。それは、ろ過細菌という微生物で、物理ろ過で処理できない有機物や生物の排泄物に由来するアンモニアなどを分解する生物ろ過の役割を果たします。水の影響を直接受ける水生生物にとってこれはとても重要な存在となりますが、この他にも管理上注意している事があり、解決できない問題点や飼育が可能なものがまだまだ沢山あります。このように、ごく一部の生きものの管理でさえとても困難なことなのですが、多くの生きものたちをバランスよく受け入

れることのできる自然の偉大さには本当に感心させられます。

(大洗水族館：田中宏典)



インフォメーション (4～6月の行事)

自然観察会

4月23日(日)

『春植物の観察 (筑波山)』

5月28日(日)

『海底火山の跡を歩こう (大子町)』

(対象: 小学4年生以上)

6月25日(日)

『土壌動物を観察しよう (菅生沼)』

* 集合場所・定員は観察会ごとに異なります。

自然講座 (定員: 40名)

6月4日(日) 13:00～15:00

『シダの世界』

(対象: 中学生以上)

自然教室 (定員: 40名)

4月22日(土) 10:00～12:00

『里山の動物たち』

5月13日、27日(土) 10:00～12:00

『植物・昆虫標本をつくってみよう』

* 2日共参加可能な方

6月10日(土) 10:00～12:00

『アンモナイトの内部を調べてみよう』

(対象: 小・中学生)

〔観察会等への申込方法〕

2週間前までに電話で申し込んで下さい。なお、希望者多数の場合は、抽選を行います(講座は先着順)。

また、本号発行時には受付を終了しているものもあります。あらかじめご了承ください。

ミュージアムパーク茨城県自然博物館
TEL 0297-38-2000

サンデー・サイエンス【楽しい体験教室】

月ごとにいろいろなテーマで、毎週日曜日にディスカバリープレイス内のスタディールームで実施しています。

観察や実験、工作などの体験をとおして、楽しみながら自然への関心を深める機会です。

テーマ

4月『化石のレプリカをつくろう』

5月『動物のちぎり絵で下じきをつくろう』

6月『野草で紙をつくってみよう』

時間 午前の部 10:30～12:00

午後の部 14:00～15:30

受付 開始1時間前から、スタディールーム前で受け付けます。希望者多数の場合は抽選を行います。

えいが会 (定員: 300名) [3階映像ホール]

4月16日(日) 『フラバー』

5月21日(日) 『マウスハント』

6月18日(日) 『ペイブ』

上映時間 14:00～ 入場無料

自然なんでも相談

自然についてわからないこと、ふしぎだな、と思っていることなど、なんでも気軽に相談ください。

相談方法 博物館あてに質問を郵送するか、直接ご来館ください。

相談日 4月9日(日)

5月14日(日)

6月11日(日)

場所 ディスカバリープレイス観察コーナー

時間 13:30～15:00

その他のイベント

サイエンスデー記念イベント

4月29日(土)、6月11日(日)

わくわくディスカバリー

4月22日(土)、5月27日(土)、6月24日(土)

化石のクリーニング

毎週木曜日、第4土曜日

■ は休館日です。

4月

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29

5月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

6月

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29

〔交通案内〕



- 常磐自動車道谷和原I.Cから20分。
- JR柏駅で東武野田線乗り換え、東武野田線愛宕駅～茨城急行バス「岩井車庫行き」乗車～「自然博物館入口」下車、徒歩10分。
- 常磐自動車道谷和原I.Cから20分。



ご利用案内

〔入館料〕

区分	本館・野外施設	野外施設のみ
大人	520円 (420円)	200円 (100円)
高校・大学生	320円 (200円)	100円 (50円)
小・中学生	100円 (50円)	50円 (30円)

(注) : () 内は団体料金 (20人以上)

企画展開催期間中については別料金となります。

つぎの日の入館料は無料です。

●11月13日(茨城県民の日) ●春分の日

●4月29日(みどりの日) ●環境の日

●高校生以下の児童・生徒は、毎月第2・第4土曜日は入館無料です。(但し、春・夏・冬休み期間中を除く)

〔開館時間〕

午前9時30分から午後5時まで (入館は午後4時30分まで)

〔休館日〕

●毎週日曜日(祝日の場合はその翌日) ●年末年始

〔編集後記〕

菅生沼のコハクチョウの姿も見かけなくなり、いよいよ春が近づいてきました。春は新しいことを始めるのにふさわしい

季節ですが、皆さんはいかがでしょう。当館は6頁でもご紹介したように海外との交流が非常に盛んで、電子メールやFAXのやりとりを頻繁に行っていますが、和

訳も英訳も散々苦勞し、また会話は通訳なしでは通用しない状況です。英語のスキルを少しでも向上できれば…と新年度を前に考えています。(N.1)